



2017

国語



注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

一
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の「僕」は難読症を抱え、言葉を読み間違えたり言い間違えたりして周りを笑わせてしまうことに悩んでいた。わざとではないのに同級生からお笑いの才能があると誤解され、母親からもユーモアセンスがあると励まされることにいらだっていた。ある日、いつも軽く微笑みながら黙って席に座っている同級生の中島まほりが、「僕」の夢に現れる。翌日、体育大会のクラス対抗リレーのアンカーに選ばれた「僕」は、放課後の練習で初めて中島まほりと言葉を交わし、彼女になら「僕」の悩みを知られても嫌ではないと感じた。

いよいよ体育大会がせまってきた。あと三日、僕はプレッシャーによる腹痛、頭痛、そのほかいろんな苦しみと闘うのだ。母親の奇声をあげる応援もいやだ。ビデオに撮られるのもそう。ただ、中島まほりからバトンをもらって、僕がビリになったりしたら、彼女にわるいや、^①彼女は僕が失敗したからといって責めたり笑ったりしないことはわかつている。だからなお更、勝って彼女に喜んでもらいたい。母親は僕が悪態をつけてから、ますます支援団体の活動とやらに時間をかけるようになった。家にいるときにはパソコンの前で書き物をしている。進路の情報を集めようとしているのか、中学のPTA活動にも急に参加するようになり、僕が学校から帰っても家にいないことが多くなった。しつこく学校のことを訊かれることもなくなったけど、あとで反動がありそうで恐ろしい。

(中略)

いつもは最前列に陣取る母親の姿が見えない。今年は来ないつもりだろうか。

雲が厚いおかげで、炎天下の辛さからまぬがれた。去年の体育大会は死ぬかと思うほど暑かった。母親が兜のような黒い帽子を被り、サングラスに黒の長い手袋をはめて、奇声をあげて応援するので、^②戦国武将の幻を見ているのかと思っただけだ。

今日、僕は二〇メートル走では一位だった。でも、あれほど練習したクラス対抗リレーは最下位になった。

中島まほりの前までは二位くらいで来ていた。いい位置で僕にバトンが渡って、トップを狙えると思っていた。中島まほりにバトンを渡すやつが焦ったのだ。ほんの少し彼女の手のひらの位置に届かなかった。バトンが落ち、それを拾おうとしてしゃがんだところに、C組の太った男が飛び込んできて中島まほりを突き飛ばした。それでもすぐに立ちあがってバトンの落ちている場所を探し、それをつかんで走り

出すまでが素早かった。ものすごく運動神経が良いひとなのだど確信できた。

なのに、デブのそいつが大声を張り上げたのだ。「そのバトン、うちのだろ」と。

彼女のせいじゃないのだから、バトンを間違えていたって、そのまま走ればよかったのだ。でも、中島まほりはそのまま走らなかつた。
③それもそうだ。彼女は中島まほりだ。もとの場所までもどり、デブのあとの走者にバトンを渡し、自分の黄色いバトンを離れたところまで拾いに行き、最下位になって僕のところまで走ってきた。

かなり差がついていた。僕は中島まほりのために何人か抜かそうと思つたが、どんなに力をふりしぼっても追いつけないまま最下位でゴールした。

終わってから中島まほりは僕の顔を見ようとせず、応援席にもどるときにも、もどつてからもずっと下を向いていて頬や耳を赤くしていた。だれも彼女に声をかけず、ひとりであつむいているので、
④僕も話しかけられないでいた。

バトンを受け取るときに、ひとこと言えばよかった。「大丈夫だよ」だとか「よくがんばったね」だとか。僕はばかだから、
むつつりとしたままバトンを受け取つた。きっと怒つているように見えただろう。

「夏見君」

クラス代表のメガネの女子が僕をよぶ。

「ごめん、言つてなかった。このあと逆転チャンス競技つていうのがあつてね、夏見君が推薦されてたの。早く行つて」

推薦したのが山上なのは明らかだ。早くと急かされていやだとも言えず集合場所に向かつた。何をするのもわからなかつたが、前の走者を見ているとグラウンド中央に並んだ紙をひろい、中を見て、あちこちに走り、靴やらハチマキやらを手にしてまた走っている。借り物競走というやつだ。

ゴールテープを持つ係には、中島まほりが入っている。元気がない細い肩でぼんやり立ち、胸の真ん中にあてて持っているゴールテープすら重そうだ。

僕はスタートしてから一番に紙を開いた。書いてあることを理解するまで少し時間がかかつた。誰かに訊いてみなくては。なんのことを書いてあるのか、誰かに確認しなくては。視線をあげると、ゴールテープを持った中島まほりがこちらを見ている。僕はまだ借り物をしていないのにゴールに向かつた。

「ねえ、中島さん」

「A をきらして言う」と、中島まほりはテープを持つ手をきゅっと握^{にぎ}って硬^{かた}くなった。
「イボウシってなに？ カエル？」

借り物を書いてある紙を差し出した。

「赤いんだって」

中島まほりが覗^{のぞ}きこむ。

「え、これ……」

「赤の、イボウシだって」

彼女は「瞬^{いっしゆん} B を丸くして、

「これ、赤いボウシ……」と、消え入りそうな声で言った。

「え、赤いボウシなの？ 僕、カエルかと思った」

「カエル？」

「ほら、イボガエルとかウシガエルとか」

「赤ガエルとか？」

「うん」

⑤ 中島まほりはふちの赤くなっていた目を細くして、テープを持っていないほうの手で口もとをおさえ、「くっ」と声をあげて笑った。そして、僕の目を見ながら C を揺らし、体を前へ折り曲げた。

「借り物に、カエルなんて、ないよね」

本当は赤いボウシと、何とか読めていた。最初に見たときにカエルのことかと一瞬思っただけで、そのあとにすぐ帽子と書いてあるのだとわかった。でも、僕のこの、おばか頭を使えば、中島まほりと話せるかもと思った。⑥ こんな頭でも計算はわりと速いんだ。

僕がずっとゴールしないのをクラスのやつらが気づいて叫^{さけ}んでいる。

「なにやってんだよー」

山上の声だ。借り物競走のことを思い出した。

「あそこ」

問二 傍線部①「彼女は僕が失敗したからといって責めたり笑ったりしないことはわかっている」とありますが、「僕」は「彼女」にどのような期待を抱いていますか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 小さな失敗など気にせずに、僕を許してくれること。
- イ おだやかで、何事にも動じない芯の強さがあること。
- ウ 前向きで、失敗は成功につながると思われていること。
- エ 周囲を気遣い、ただ黙って微笑んでいてくれること。
- オ 優しく思いやりがあり、僕の良き理解者であること。

問三 傍線部②「戦国武将の幻を見ているのかと思ったほどだ」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして適当なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 子供を励まそうと、必死で応援してくれる頼もしい母親の存在をありがたく思う気持ち。
- イ 暑さにも負けずに、威厳ある姿で最前列に立って応援団を率いる母親を尊敬する気持ち。
- ウ 勇ましい姿で一緒に戦っているように思えて、応援してくれる母親を信頼する気持ち。
- エ 子供の気持ちはそっちのけで、大声を挙げて応援する母親の行動を不快に思う気持ち。
- オ 我が子のことしか見えずに、時代錯誤な服装のまままで応援する母親を軽蔑する気持ち。
- カ 暑いのに黒づくめの大きな出で立ちで、応援に熱くなっている母親に呆れる気持ち。

問四 傍線部③「それもそうだ。彼女は中島まほりだ」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 短い文を重ねて表現することで、「彼女」の行動が素早く運動神経が良いことに驚いている「僕」の気持ちを描写している。
- イ 断定的な表現を使うことで、おとなしいが、真面目でいつも人の心を気遣う彼女の性格を再認識したことを強調している。
- ウ 固有名詞を使うことで、つらい状況にいる「彼女」に同情しながらも客観的な態度をとっている「僕」を表現している。
- エ リズミカルに表現することで、「彼女」を見守っている「僕」のプレッシャーがどんどん高まっていることを暗示している。
- オ 「それ」「そう」という指示語を使うことで、緊迫した状況を直接的な言葉で表現せずに、読者の想像をかき立てている。

問五 傍線部④「僕も話しかけられないでいた」とありますが、ひとりであうつむいている「中島まほり」に話しかけられないのはなぜですか。分かりやすく説明しなさい。

問六 空欄 A 〃 C に入る適当な語を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア 肩
- イ 目
- ウ 耳
- エ 口
- オ 息

問七 傍線部⑤「中島まほりはふちの赤くなっていた目を細くして、テープを持っていないほうの手で口もとをおさえ、『くっ』と声をあげて笑った」という表現から読み取れる「中島まほり」の気持ちの変化の説明として、最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分を突き飛ばした人への怒りをこらえていたが、「僕」の笑顔を見ているうちにしだいにおだやかな気持ちになっていった。
- イ 自分のとった行動を後悔していたが、その気持ちを誰にも気づかれないので元氣よく笑うことでごまかしたいと思った。
- ウ リレーで最下位だったことで同級生に無視されたことが悲しかったが、「僕」だけは自分の味方なのだと気づいてほっとした。
- エ 「僕」が怒って一言も話しかけてくれないことがショックだったが、ようやく「僕」が機嫌を直してくれたので安心した。
- オ 自分の失敗を恥じて落ち込んでいたが、「僕」の言っていることがあまりにも面白くて笑ってしまい、明るい気持ちになった。

問八 傍線部⑥「こんな頭でも計算はわりと速いんだ」とありますが、「僕」はとっさにどんな計算をしたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問九 傍線部⑦「僕はグラウンドの真ん中まで走っていき、両手の人さし指を立てて、飛びあがった。かなり高く、カエルみたいに」とありますが、なぜ「僕」はこのような行動をとったのか、その理由として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 落ち込んでいた中島まほりを笑わせることが「僕」の一番の目的だったことを、皆に知ってほしかったから。

イ 機転を利かせて「赤いボウシ」をわざと「カエル」と読み間違えたことが、自分でも面白く思えたから。

ウ ビリなのにテープを張ってくれた中島まほりの笑顔を見て、応援してくれる皆も喜ばせようと考えたから。

エ ユーモアのある行動で人を元気づけられることに初めて喜びを感じて、自分の力に自信を持てたから。

オ リレーでビリで落ち込んでいたクラスの仲間を喜ばせることができ、仲間の信頼を勝ち得たと感じたから。

問十 傍線部⑧「それが僕の、僕だけの宝物に見えた」とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「自分」という言葉の意味を改めて説明することはとても難しい。辞書を見ても、「おのれ」だとか、「自身」といった同義語が並んでいるだけだ。「自分」というものは、「他者」を認識したのちに現れる概念(がいねん)だろうと思う。というのも、幼児が最初に存在を認めるのは、目に見える他者(多くの場合、母親)であり、言葉としても、「僕」よりは「ママ」の方が早い。① 小さい子は、自分のことを「私」とは言わず、自分の名前で示す。犬を観察していると、他者を見分けること、他者に名前があることは理解しているようだが、自分の名前を知っているかどうかは非常に疑わしい。名前を呼ばれば、こちらを向いて、近づいてくるけれど、それは名前ではなく、「来い」という動詞の命令形だと認識しているにちがいない。

自分を認識するのは、「意識」あるいは「思考」である。自分の顔を見るには鏡が必要で、常時見られるわけではない。子供にとつては、母親の顔に比べて、自分の顔は見慣れない存在である。a、声についても、自分の声だけは伝わる経路が異なるので少し違ちがって聞こえる。匂いも、自分の体臭は気づきにくいものだ。

b 一方では、痛い、痒かゆい、暑い、などといった体験は、自分のものしかない。他者がどう感じているのかは、まったくわからない。他者の感覚を体験することはできないので、他者は何をどう見ているのか、ほとんど不明である。それは、その仕草や言動から想像する以外にない。c、想像するときの基準は、実は「自分が感じたもの」である。自分は、赤い色をこんなふうに見た。

d、ほかの人も、赤い色を同じように見ているにちがいない、という想像である。② この想像は、言葉を使ったコミュニケーションでかなり精度を上げることができるが、しかし、その言葉も最終的には各自の感覚を基準にしているから、接近することはできても、完全な一致は不可能である。

僕の息子は、三歳になるまでしゃべらなかつたが、あるとき(自動車に乗っているときだった)、僕を指さして「パパ」と言い、僕の奥さん(あえて敬称)を指さして「ママ」と言い、最後に自分を指さして「ボク」と言った。それがわかったので、あまりの嬉うれしさに、やっとなしゃべる気になったようだった。③ それまでは、人の話を聞いたり、テレビを見たりして、笑ったり、怖こわがったり、泣いたりすることはあつたけれど、言葉はしゃべらなかつた。僕の奥さんは、ア、かなり心配したようだが、その後、彼は普通ふつうに成長した。彼のことをこれ以上書くことはプライバシーに関わるから控ひかえるが、少なくとも落ちこぼれではなかつたし、イ、とんでもない天才でもなかつた。

僕がここで書きたいのは、X、ということである。ほとんどの人は忘れていよう。僕もよくは覚えていないのだが、しかし、映像としては記憶がある。自分はここにいるが、大人たちはこちらを見ていない。どうすれば、こちらを見てもらえるだろう、と考えたことがある。見えているのは天井の木目、それからテーブルの裏側だった。あるとき、僕はまだ動けなかったし、言葉もしゃべれなかったが、既に自分の存在を認識していたはずだ。

幼稚園児や小学生ならば、ウもう「自分」を知っている。たとえば、大人は子供に対して、よくこう言う、「自分でしなさい」と。この意味は、つまり「私はやってあげない」である。子供のときには、自力でできることが限られている。食べたくても、食べるものに手が届かない。本を読みたくても文字が理解できない。それらが成長とともに、エだんだん自分でできるようになる。自分でできることが増えてくる段階では、^④自分ですることが「楽しく」なる。だから、子供はそのうちこう言うようになる、「やらせてやらせて」と。ようするに、なんでも自分の手で触り、自分のからだを使って試したくなるのだ。複雑なもの、危険なことでも、なんでもやってみたい。自分ですることが、それだけでなんとなく楽しい。この感覚は、多くの子供に共通するものであり、一言で表現するならば、「好奇心」だろうか。「大人と同じようにしたい」というのは、「大人になりたい」という成長に対する欲求であり、生き物の本能といえる。

見るだけでは満足できない。手で触ってみたい。動かしてみたい。ボタンがあれば押してみたい。レバーがあれば引いてみたい。「見る」「聞く」といった、ある意味受動的な感覚ではなく、「触れる」「嗅ぐ」「食べる」「持つ」「動かす」というように^⑤どんどん能動的になっていく。そして、好奇心とはつまり、それをすることで新たに得られる「情報」への注し渴望だといえるだろう。触れば、より多くの情報が手に入ることを子供は知っているのだ。蓋を開ければ中身が見えることを、人間の子供ならば既に認識している。分解してしまえば、中身の仕組みが見える。食べるものを欲しがる食欲と同様に、情報を欲しがっている。食べ物と同じものでも満足できるが、^⑥情報は既知のものでは価値がない。常に新しいものを欲しがる。これは、「自分の」中に取り入れるものであり、自分を形成する要素となる。好奇心は、それを欲する本能なのだ。言葉をかえれば、オもつと自分を豊かにしたい、もつと自分を強くしたい、という生への欲求でもある。

見たり聞いたりしているだけでは、自分の周囲に変化はなかった。しかし、触ったり、持ったり、動かしたりすれば、自分以外のもの（生物も物体も）に影響を与えることがやがてわかる。これは、自分以外のものをコントロールすることであり、その影響範囲が広がることで、自分に力がついてくるような感覚を持つ。こうなれば、自分の支配下となるものを探し、それを確かめようとする。「自分」の勢力を拡大する行為が増えてくる。おもちゃで遊ぶのもそうだし、泣いて母親を呼びつけることも同様である。

このようにして、人は子供のときから「自分」を常に確かめ、自分が有利になるように行動する。本能的な欲求を満たす行為以外に、もつ

と戦略的ともいえる知恵を巡らせるのも、幼いときからの普通の行動パターンといえる。それも、「自分」を中心に認識している証拠である。

『自分探しと楽しさについて』森博嗣もりひろしの文章による

(注1) 概念…物事のもつ全体的な意味や内容。

(注2) 渴望…心から望むこと。

(注3) 既知…すでに知っていること。

問一 傍線部①「小さい子は、自分のことを『私』とは言わず、自分の名前で示す」とありますが、なぜそうするのですか。簡潔に説明しなさい。

問二 空欄 a に入る言葉の組み合わせとして、正しいものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア	a	また	b	ところで	c	だから	d	そして
イ	a	そして	b	だから	c	また	d	しかし
ウ	a	ところで	b	そして	c	しかし	d	だから
エ	a	そして	b	ところで	c	しかし	d	また
オ	a	また	b	しかし	c	そして	d	だから

問三 傍線部②「この想像は、言葉を使ったコミュニケーションでかなり精度を上げることができる」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「赤い色」を他者がどう見ているかは、相手を注意深く観察することで、自分の予想に近づけることができるということ。
- イ 「赤い色」を他者がどう見ているかは、相手と話し合うことで、自分が想像していたよりもっと確かなものになるということ。
- ウ 「赤い色」を他者がどう見ているかは、自分の想像内容を検討することで、相手の感覚にかなり似たものになるということ。
- エ 「赤い色」を他者がどう感じているかは、自分の感覚を研ぎ澄ます^すことで、以前よりも一層確かなものになるということ。
- オ 「赤い色」を他者がどう感じているかは、相手と話し试着みることで、相手の感覚そのものに到達することができるということ。

問四 傍線部③「それ」とは何を指していますか。十字以内で答えなさい。

問五 空欄 X に入る文として、最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 幼いときの記憶は、ぼんやりして頼りない
- イ 記憶とは、しばしば事実と異なっている
- ウ 自分のことが、どうしても自分でできない
- エ 誰でも、「自分」に気づくときがある
- オ 「自分」を誰かに分かってもらいたい

問六 傍線部④「自分ですることが『楽しく』なる」とありますが、そのような気持ちにさせているものは何ですか。本文中より八字で抜き出しなさい。

問七 傍線部⑤「どんどん能動的になっていく」とありますが、子どもの行動がそうになっていくのには、子どもの成長にとってどのような価値がありますか。三十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「情報は既知のものでは価値がない」とありますが、なぜそのように言えるのですか。三十字以内で説明しなさい。

問九 波線ア「かなり」、イ「とんでもない」、ウ「もう」、エ「だんだん」、オ「もっと」の中には、一つだけ他と性質の違うものがあります。それを記号で答えなさい。

問十 本文の内容として適当なものにはA、不適当なものにはBと答えなさい。

- ア 他者よりも自分を認識するのが難しいのは事実だが、名前を付けることで解決できる。
- イ 筆者の息子も三歳までしゃべらなかつたように、子どもの言葉は脳の成長と関係がある。
- ウ 他者が物事をどのように見たり感じたりしているかは、自分の感覚に頼らざるを得ない。
- エ 子どもが自分の力に自信を持つようになると、次第に他者にも良い影響を与えるようになる。
- オ 子どもの行動には、自分の存在を有利にしようとする戦略が自然と働いている。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 長い時間をかけて信頼関係をギズき上げる。
- ② 彼女の歌声を誰もがゼツサンした。
- ③ キユウキヨクの選択をする。
- ④ コウシユウ電話をあまり見かけなくなった。
- ⑤ 彼はオリンピックのセイカを届けるランナーだ。

注意
一字制限の問題では、句読点も一字として数えます。

一

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
				A					a
				B					b
				C					

二

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
ア									
イ									
ウ									
エ									
オ									

三

④	①
	き
⑤	②
	③

受験番号	フリガナ
	氏名

得点	
----	--